

Rome in *Three Coins in the Fountain* and *Coins in the Fountain*

TORIGOE Teruaki J. I.

Keywords: Rome; *Three Coins in the Fountain*; representation; love-match; economic disparity; Orientalism

ABSTRACT

Three Coins in the Fountain, the 1954 American film that narrates the fulfillment of three loves with the city of Rome as its background, is likely to be slighted for its supposed shallowness both in theme and in its treatment of Rome. Because of its deliberate popularity, however, this Jean Negulesco movie presents several interesting problems.

Surprisingly, this color picture represents Rome as a city of water. This illusory representation is fabricated by adroit selection and accumulation of the water scenes of this city: fountains, ponds, waterfalls and a river, and also by a clever insertion of scenes from Venice, a real city of water. And this illusory image of the city, combined with the watery themes that appear on the important stages of the development of the narrative, makes possible this story of the magical power of the Fountain of Trevi. In this movie the fountain helps three couples to surmount difficulties, leading them to happy marriages.

This film, although it takes one theme and some episodes from an earlier novel, *Coins in the Fountain*, differs very much from the novel in its main theme: the film is about love and marriage whereas the novel is about the question of belonging. The protagonist in the novel ponders on the question of staying in or leaving Rome, in which he has worked for fifteen years, finally deciding to leave for his home, the United States.

There are, however, some interesting features in common between these two works.

Firstly, both these works conform to the dominant love-match custom. The heroines in both works unhesitatingly search for love that leads to marriage, unlike heroines in contemporary Antonioni films such as *Le amiche* and *L'avventura*.

Secondly, both the film *Three Coins in the Fountain* and the earlier

novel are based on the extreme economic disparity between the United States and Italy, the Marshall Plan provider and its receiver in the post-World War II period. Precisely because of this disparity the young American heroines who work in Rome in both the film and the novel, while living in relative affluence, cannot find proper dates among Italian men.

Thirdly, both the film and the novel, written in an atmosphere in which “Asiatic” locals are despised, bless the couples who surmount this cultural prejudice.

『愛の泉』とその原作（？）のなかのローマ

鳥越輝昭

はじめに

『愛の泉 *Three Coins in the Fountain*』は一九五四年に公開されたアメリカ製のカラー映画である。監督はジーン・ネグレスコ (Jean Negulesco, 1900-1993)。この映画はおもにイタリアの都市ローマを舞台として、三組の男女が愛し合い結婚を決めるまでを描き出す。公開の年、この作品は、ふたつのアカデミー賞―撮影賞と主題歌賞―を受賞した。

『愛の泉』は、他愛もない大衆的な恋愛映画として、また、ローマを表面的に取り扱った作品として片付けられがちである。だが、米伊ふたつの文化の描き出し方についても、ローマそのものの表象のし方についても、この映画はまさに大衆的であるゆえに、重要な問題を含んでいる。

また、この映画は、先だって出版されていたジョン・セカンダリ (John H. Secundari, 1919-1975) 作の小説 *Coins in the Fountain* (1953) から想を得たものだが、その小説との関係が、すこぶる興味深い。映画は、

重要なストーリー展開については、およそ原作とその映画化とはいえないほどの相違を見せながら、それにもかかわらず、小説と共通する重要な問題を提起しているのである。

本稿は、映画『愛の泉』のなかのローマに関する重要な表象、そしてまたこの映画と小説 *Coins in the Fountain* との比較から浮かび上がる問題を取り扱うものとなる。

一 『愛の泉』の主題歌

映画『愛の泉 *Three Coins in the Fountain*』が、アカデミー撮影賞とアカデミー主題歌賞とを得た作品であることは、すでにふれたとおりである。この映画の撮影技術と主題歌の質そのものが優れていることはむろんだが、わたくしが注目したいのは、別の側面である。

まず、主題歌について検討しよう。主題歌は、映画と同じく『*Three Coins in the Fountain*』と題され、映画の冒頭と最後に歌われるほかに、本編のなかで何度かメロディーだけが使われる。日本では、この曲は「愛の泉」の題で親しまれてきたから、以下でもその名で呼ぶことにする。映画の冒頭で主題歌を歌っているのは大歌手フランク・シナトラ (Frank Sinatra, 1915-1998) で、歌はヒットし、スタンダード曲として後世に残った。

主題歌「愛の泉」の歌詞を原詞に忠実に訳出すれば、つぎのようになる。

泉のなかの三つの硬貨

この泉 (the fountain) のなかの三つの硬貨

それぞれが幸せを求めている。

成就を望む三人の恋人たちが投げ入れた硬貨

泉が祝福するのはどれだろう。

泉のなかの三つの心 (hearts)

どの心も落ち着き先 (home) を求めている。

三つの心は、今はローマの中心 (heart) 近くの

泉のなかにいる。

泉が祝福するのはどれだろう。

泉が祝福するのはどれだろう。

泉のなかの三つの硬貨

さざ波のなかで、きらきら光る。

かなえられるのは、ひとつの願いだけ

バレンタインの愛のひも (a valentine) を受け取るのは、ひとりだけ。

わたしの願いが、かないますように

わたいの願いが、かないますように

わたしの願いが、かないますように

歌詞のなかで「この泉 the fountain」と呼ばれているのは、「トレビの泉 Fontana di Trevi」である。ローマを訪れる多くのひとたちは、この泉に背を向けてコインを投げ込む。そうすれば、またローマに戻ってこられるという伝承があるからだ。この伝承を広めたのは映画『愛の泉』だといわれることがある。映画のなかでは、アメリカからローマにやってきたばかりの女主人公は、この伝承を知らない設定になっているから、すくなくともアメリカに伝承が広まったのは、この映画以後だといえるかもしれない。

この主題歌の歌詞全体は、映画のストーリー展開をおおむね要約しつつ、重要な点でストーリーから逸脱している。それに、主題歌も映画自体も、じつはトレビの泉にまつわる伝承から逸脱しているのである。

映画『愛の泉』は、同じ頃作られた『ローマの休日 Roman Holiday』などと違い、本邦では再上映されることのない映画である。DVDソフト(20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン、2007)は販売されているけれども、あまり見られることのない作品だろうから、筋をやや詳しく辿っておくの

がよいだろう。

ストーリーは、ローマで働く三人のアメリカ人女性秘書を中心に展開する。三人のうちのふたりはまだ若い。ひとりとは米国からローマに来たばかりで、名をマリア (Maria) という。もうひとりは、すでにしばらくローマで働いてきた女性で、名をアニータ (Anita) という。アニータは、これまで勤めたアメリカ合衆国配給局を近々やめてアメリカに帰る予定で、マリアはその後任である。アニータは、もうひとりの、やや年配の女性フランス (Frances) と宏壮なヴィラをシェアして暮らしており、新米のマリアも、このヴィラと一緒に住まう。フランスは、長らくシャッドウェル (Shadwell) という米国人作家の秘書を務めてきた女性である。

マリアは、ディーノ (Dino) という名のイタリア人公爵に心を惹かれ、気に入られるためにさまざまな策を弄し、公爵から結婚の申し込みを受ける寸前まで進む。しかしマリアは、その間に反省して、策を弄したことを告白し、一旦ふたりの関係は終わる。マリアは、アメリカへ帰ることにするが、まだ公爵を愛しつづけており、公爵の方も心底ではマリアに心を惹かれている。

アニータは、配給局に働くジョルジョ (Giorgio) という名のイタリア人通訳に心を惹かれており、ジョルジョも長らくアニータを愛し続けている。しかし、配給局には、アメリカ人吏員が現地雇用のイタリア人と交際してはならないという不文律があるため、ふたりの関係は進展しなかった。ある日、ジョルジョがアニータを郷里でおこなわれる妹の婚約祝いに誘い、アニータは、近々に配給局を退職することになっているので構わないと思って同行する。ところが、ふたりは、一緒にいるところを配給局の局長夫妻に目撃されてしまう。ジョルジョはこの事件を機に解雇される。アニータはこの解雇に責任を感じるばかりか、局長から妊娠まで疑

われたことがきっかけで、ジョルジョと関係を結ぶ。しかし、職を失ったジョルジョとでは結婚生活が営めないと考え、決別してアメリカへ帰ろうとする。

フランシスは、ヴィラをシエアしているふたりの女性たちがどちらもアメリカに帰ることになり、ひとりほっちになつてしまうのが悲しく、自分もアメリカに帰ることに決めて、雇い主の熟年作家シャッドウエルに辞職を願う。するとフランシスが長年愛しつづけてきたシャッドウエルが結婚を申し出てくれ、フランシスは喜んで受け入れる。ところが、直後にシャッドウエルは、医者から、死を覚悟しなければならぬ病に罹っていると告げられ、結婚の申し出を撤回する。しかし、シャッドウエルの病はすぐにフランシスの知るところとなり、フランシスがすっかり気落ちしているのを見て、シャッドウエルは考え直し、やはり結婚することにする。そして、ふたりは、イタリアより進んだ治療の受けられるアメリカに旅立つことにする。

シャッドウエルは、フランシスから、マリアと公爵、アニータとジョルジョの二組の男女の恋のまとめ役を頼まれる。シャッドウエルは、公爵にマリアと結婚するように働きかける。シャッドウエルはまた、配給局の局長に、イタリア人通訳ジョルジョを再雇用するように説得して雇用させるので、アニータはジョルジョと結婚する条件が整う。こうして映画の最後に、三つのカップルはめでたく結婚へと進んでゆく。

さきほど、わたくしは、「この主題歌の歌詞全体は、映画のストーリー展開をおおむね要約しつつ、重要な点でストーリーから逸脱している」と書いた。こうして粗筋を確認してみれば明らかだろう。主題歌の歌詞は、テレビの泉に投げ込まれた三つの硬貨に託された願いのうちで叶うのはひとつだけだと強調するが、映画のなかでは、三つの願いがすべて叶う。すなわち、歌詞では、「かなえられるのは、ひとつの願いだけ／バレンタ

インの愛のひもを受け取るのは、ひとりだけ」と歌われるが、実際には、三つの願いが成就し、どの心も、結婚による「落ち着き先(home)」を見つけるのである。

細かなことをいうなら、冒頭のトレビの泉の場面で硬貨を投げ込むのは、マリアひとりだけである。しかし、その場面で、フランスは毎春硬貨を投げ込んでいると発言するから、フランスもすでに硬貨を泉に投げ入れている。マリアがローマに来たのは、三人の女性の服装から見ても、初夏のようだからである。アニータは、アメリカに帰って結婚する予定だといって、泉に硬貨を投げ入れないが、映画の半ばまで進むと、恋の相手のジョルジョが、自分は硬貨を投げ入れたと語る。したがって、要するに、投げ込まれた三つの硬貨に託された願いは、すべて叶えられるわけである。

主題歌の歌詞は、この映画が、恋愛と結婚への願いが泉の霊力によって実現される内容であることを端的に示している。しかしながら、三つの願いのうち実現されるのは、ひとつだけではなく、実際には三つ全部なのである。

歌詞の内容が実際のストーリー展開とずれているのは、おそらくは意識的な方略だろう。映画冒頭の歌のなかで、恋愛と結婚への三つの願いのうちで叶えられるのはひとつだけだと強調しておけば、観客は、最後までどのカップルの願望が実現するのかについてはサスペンス状態におかれる。そして、最後に、三組のカップルの願望がすべて実現するのを見て、良い意味で予想を裏切られ、幸せな気持ちにさせられる。

ところで、わたくしはさきほど、「主題歌も、映画自体も、じつはトレビの泉にまつわる伝承から逸脱している」といった。それについても書いておこう。トレビの泉に関する一般的な伝承は、泉に背を向けて硬貨を

投げ入れて、「またローマに戻らせてほしい」と願えば、叶えられる、というものである。この伝承は、映画冒頭の三人の秘書たちが泉のそばにいる場面で、アニータによって正確に、「願いの内容は決まっています、またローマへ戻らせてください、なのよ」、と解説される。 MARIA は、硬貨を投げ入れる際に、願いを少し変化させ、「少なくとも一年間はローマに居させてください」と願うが、祈願内容の変化は大きくない。しかし、泉への願掛けについて、主題歌が述べる内容も、映画で語られる内容も、じつは恋愛と結婚とについての願いとその成就である。主題歌と映画は、テレビの泉にまつわる伝承を受け継いでいるように見せながら、じつは泉についてまったく新しい霊力物語を作り出しているのである。

映画が語るテレビの泉のこの霊力物語は、三人の女主人公たちの少なくともふたりの深層心理をみごとに突いている。 MARIA は、なるほど言葉では、「少なくとも一年間はローマに居させてください」と願うのだが、じつは心の奥では、ローマという新しい環境のなかで、恋人を見つけて結婚したいと願っている。魅力的な公爵に出会うとすぐに積極的に接近してゆくところから判断して、それは間違いない。毎春、泉に硬貨を投げ込んでいるフランシスにしても、そうであるだろう。長年愛していたシャッドウェルから結婚を申し込まれたあとの有頂天ぶりからみて、それは間違いない。この映画は、テレビの泉の霊力の働き方をすり替えて、女性たちの恋愛結婚願望と結びつけ、恋愛映画に仕立てているのである。その点に注目するなら、『愛の泉』という邦題は映画の主題に肉薄しており、原題の *Three Coins in the Fountain* に勝るとも劣らない名訳だといえる。

主題歌「愛の泉」の旋律は、映画のストーリーが展開してゆくなかで、三つのカプルの恋愛が前進しそうなどころでかならず演奏される。別の旋律が流れている状態から、この旋律にすっと切り替わるのが巧みであ

る。アカデミー主題歌賞は、おそらく、ただ単に主題歌そのものに与えられたのではなく、映画全体にわたる主題歌のこの巧みな使い方に対しても与えられたものだろう。

二 『愛の泉』の映像

映画『愛の泉』がアカデミー撮影賞を受賞したことは、さきにふれたとおりである。撮影賞を与えられただけあって、この映画はカラー撮影の利点を活用して美しい映像を作り出しているのだが、わたくしが注目したのは、映像の作り出し方である。この映画は、都市ローマについて特異な表象を意図的に作り出している。

『愛の泉』は、題名や配役などを映し出す前に、独立した短編映画のように、主題歌をまるごと観客に聞かせながら一連の映像を映し出す、おもしろい構成になっている。主題歌の歌詞の内容が重要なことは、すでにふれたとおりだが、いま注目したいのは、映画がここで見せる映像の本身である。

主題歌が流れるあいだ、つぎつぎに写されてゆくのは噴水と泉と滝と池と川……要するに、すべて水の映像である。最初に映し出されるのはレプブリカ広場の噴水で、それからナヴォナ広場の泉やティヴォリの滝やボルゲーゼ公園の池などが、つぎつぎに映し出されてゆく。カメラはそのあと、ローマ市南方の丘の上から郊外と新しい団地群とを映し出し、ゆっくりとローマ旧市街へ動いてゆくが、その間、これら陸上の建物群と同じくらい際立たされるのがテベレ川である。そしてカメラは最後にテレビの泉を映し出す。映画の冒頭に置かれたこの一種の短編映画は、ローマの水を特集したものである。

映画は、本編に先立つこのローマの水特集の短編映画のあとで、題名・配役・監督などを紹介して、本編に入ってゆく。本編では、はじめに手際よく三人の重要な女主人公を紹介すると、その後でこの三人にトレビの泉のほとりで立ち止まらせる。むろん、それは水の光景である。この映画は、本編の最後でもまたトレビの泉を映し、そのほとりで三人の女性たちの愛を成就させる。つまり、この映画の本編はトレビの泉の映像を大きな枠組みとして、ストーリーを展開させる作品である。そして泉の映像で印象的なのは、当然ながら水である。さらに注目すべきことに、この映画は途中で、かなり長く―実際は五分間ほどだが、印象としてはもつと長く―ヴェネツィアでのエピソードを描き出す。水都ヴェネツィアが舞台であるのだから、このエピソードには、空と船から撮影されたものをふくめて、豊かな水の映像が連続する。このシークエンスも、冒頭の一の水特集の短編映画とおなじく、映画全体のなかでの水の存在感を増すものである。

このように、『愛の泉』は、映像の面で、水が圧倒的な存在感を示す映画だが、この存在感ある水は、ストーリーの重要な展開と密接に関連付けられている。映画の主題全体が、トレビの泉の霊力によって三つの恋が成就する話であることは、すでにふれた。だが、水とストーリーとのつながりは、それだけではない。

右でふれたヴェネツィアのシークエンスは、女主人公のひとりのマリアが、はじめてままとまった時間をデイーノ公爵と一緒に過ごすエピソードを描き出すものである。興味深いことに、映像の背後に流れる音楽が、途中から主題歌「愛の泉」のテーマに切り替わり、この男女が相思の関係に入ったことが暗示される。この映画のなかでは、トレビの泉の水と、ヴェネツィアの潟と運河の水とは繋がっており、泉がマリアとデイーノ公爵との恋を取り持つのである。

もうひとりの女主人公アニータとイタリア人ジョルジョが相愛の関係になる場面も、水と関連付けられている。ジョルジョの出身地である山地の村で、アニータは、ジョルジョから、ふたつのことを聞かされる。ひとつは、ジョルジョが少年時代にはじめてローマを訪れたときに、トレビの泉に硬貨を投げ入れ、弁護士になる勉強のためにローマに戻るように願うとともに、良い妻を与えてくれるように願ったらしいことである。もうひとつは、ふたりが見下ろしている谷間には、池があり水が流れているということである。そして、この場面のややのち、ふたりが口づけを交わす場面で主題歌「愛の泉」のテーマが流れる。このシークエンスでは、映像そのものに水は存在しないが、台詞のなかにトレビの泉の水と谷間の水とが存在していて、やはり、トレビの泉の霊力がこの男女に働くのである。

三人目の女主人公フランシスが熟年作家シャッドウエルとの恋を成就させる場面に現れる水も、興味深いものである。シャッドウエルは、命に関わる重病に罹っていることを医者から聞かされたのち、バーに立ち寄り、ダブルのウイスキーを六杯注文して、つぎつぎに飲む。シャッドウエルの事情を知ったフランシスも後を追ってきて、同様にダブルのウイスキーを六杯注文し、強い酒は飲めないのだが、一杯だけ飲んで酔っ払う。酔っ払ったフランシスは、近くのボルゲーゼ公園の池でボート遊びをしている子供のボートを、池の真ん中へ押し出し、それを取ろうとして池に入って、尻餅をつき水浸しになる。シャッドウエルは、フランシスを自宅に連れ帰り、洗面器の水に浸したタオルを使いながら介抱する。これより先、シャッドウエルは、自分の命が長くないと知り、フランシスに一旦申し出た結婚を撤回していたのだが、これら一連のフランシスの行動を見て、やはり結婚することにするのである。注目すべきことに、シャッドウエルが洗面器の水を使いながらフランシ

スを介抱する場面で、やはり、主題歌「愛の泉」のテーマが背後に流れる。この一連のエピソードの場合、ウイスキーはいわば偽の水、公園の池と洗面器の水は本物の水であって、これらの水は、毎春フランスが硬貨を投げ込むテレビの泉の水に繋がっており、泉の霊力が働くのである。

こうして、映画『愛の泉』では、テレビの泉とそれに関連するさまざまな水が、映像面で圧倒的な存在感を示し、その水がストーリーの展開と緊密に関連している。

しかし、現実のローマでは、水の存在は重要ではあるが、圧倒的ではない。さまざまな映画のなかでも、ローマは通常は〈水の都〉として描き出されることはない。圧倒的な〈水の都〉としてのローマのイメージは、映画『愛の泉』に見られる特異な像である。

この点については、『愛の泉』とほぼ同時代の似た性格の映画―ローマでカラーフィルムを使ってロケーション撮影された映画―と比べてみるとよいだろう。ひとつは、ロイ・ロウランド (Roy Rowland, 1910-1995) 監督作『アリヴェデルチ・ローマ Arrivederci Roma』(1957. 英語版タイトルは *Seven Hills of Rome*)、⁹⁶ ひとつは、ホセ・クインテロ (José Quintero, 1924-1999) 監督作『ローマの哀愁 *The Roman Spring of Mrs. Stone*』(1961)、⁹⁷ 三つ目は、デルマー・デイヴズ (Delmer Daves, 1904-1977) 監督作『恋愛専科 *Rome Adventure*』(1962) である。これらの作品が映し出すローマの映像は、『愛の泉』とはかなり異なっている。

『アリヴェデルチ・ローマ』は、上空からのローマ空撮の他に、ローマ市中のさまざまな場所で撮影をおこなっている。『ローマの哀愁』もローマ市中のさまざまな場所で撮影をおこなっている。『恋愛専科』は、自動

車からローマ市街の移動撮影をおこなう他に、やはりローマ市中のさまざまな場所で撮影をおこなっている。これらのどの映画の場合にも、ローマ市中の水の存在はあまり目立たない。ローマは旧市街の中心あたりに緑の樹木が多いが、市中を歩くと建物のファサードや壁―灰色や赤茶色の表面―が目立つ都市である。これら三つの映画の映像は、こういうローマの様子を忠実に再現しているように感じられる。

なぜ、『アリヴェデルチ・ローマ』と『ローマの哀愁』と『恋愛専科』が映し出すローマの映像が、町歩きをするときの印象に近く感じられ、『愛の泉』の映像はそうではないのか。その理由は、これら四本の映画が映し出している同一の対象を比較してみると明らかに異なる。それはナヴォナ広場 (Piazza Navona) である。『アリヴェデルチ・ローマ』では、この広場のひとつの泉―泉は三つある―のほとりで、主人公のテノール歌手が、辻音楽師の少女といっしょに主題歌「アリヴェデルチ・ローマ」を歌う。『ローマの哀愁』では、若さを喪失したと才能のなさを自覚して舞台を引退したアメリカ人女主人公が、夫も失い、滞在先のローマで孤独を深く感じながら、この広場をさまよう。『恋愛専科』では、女主人公が働く本屋がこの広場のひとつの泉のそばにあり、この広場は主人公の男性とデートする場所でもある。これら三つの映画では、ナヴォナ広場の泉は重要な場所だが、注目すべきは、泉は広場全体のなかの一部分として映し出されることである。それは、広場を訪れる者の通常の見方でもある。

他方、『愛の泉』は、ナヴォナ広場の三つの泉のうちのふたつを、冒頭の水特集の短編風映像のなかで映し出すが、その映像は泉と噴水とに近接し、周囲の広場を捨象して、泉と噴水だけを集中的に映し出すのである。映画『愛の泉』は、こういう選択と近接と集中とをローマ全体に及ぼして、〈水の都〉ローマというイメージ

を作り出している。その映像はまことに美しく、ストーリーの主題と展開とにみごとに寄り添い、アカデミー撮影賞を与えられたのも当然と思わせるけれども、その映像はまた幻影でもある。

三 『愛の泉』と *Coins in the Fountain* の違い

映画『愛の泉』と小説 *Coins in the Fountain* とのあいだには、おどろくほど大きな相違がある。映画は、著しい変更・削除・追加を小説にほどこし、それによって小説とは似ても似つかない恋愛映画をつくりあげたのである。

映画『愛の泉』が小説 *Coins in the Fountain* に与えた最大の変更は、テーマそのものに関わっている。映画『愛の泉』はひたすら恋愛と結婚とをめぐる作品だが、小説 *Coins in the Fountain* には大小ふたつのテーマがある。小テーマは、映画とおなじく恋愛と結婚とをめぐる。だが、大テーマは、アメリカ人はローマにいくべきか、アメリカに戻るべきか、という問題をめぐるものである。それは、一般化すれば、アメリカ人は異邦に留まるべきか、それとも故国に戻るべきか、という問題であり、言い方を変えるなら、アメリカ人にとって「落ち着き先 home」はどこにあるのかという問題である。

小説 *Coins in the Fountain* には、主人公の男性と副主人公のもうひとり男性、そしてひとりの女主人公が登場する。副主人公の男性は名をシャッドウェルという老年のアメリカ人作家で、長らくローマに住まってきた人物である。

作家シャッドウエルは、表面的には映画にも引き続いて登場する人物だが、小説のなかでは、性格も立場も行動も、映画とは大きく異なっていた。小説のなかのシャッドウエルは、冒頭からすでに喉頭癌に冒されており、小説の終わり近くで死んでしまう。この人物は、最後まで結婚することもなく、恋の仲立ちをすることもなし。そして、アメリカに戻ることもせず、ローマで死ぬのである。映画は、この登場人物を完全に別種の存在に変更したのである。

小説 *Coins in the Fountain* の主人公はフランク・バーティン (Frank Bertin) という名の人物で、映画にする際に抹消された。バーティンは、アメリカの通信社のローマ支局長で、すでにこの町に十五年間住まい、アメリカ人とイタリア人の混血である妻と、豪華なアパートメントに暮らしている。バーティンはローマが好きだし、妻も豪華な生活のできるローマを離れたがらないが、ローマ支局長では仕事の面で腕がふるえず、出世の道が閉ざされているので、アメリカに帰ろうかどうしようかと迷っている。このバーティンが、友人シャッドウエルが完全にアメリカを捨てた結果としてローマでむなしく死んだ様子を見て、帰国の決意を固める。小説の主筋は、バーティンが帰国しようか、ローマに留まろうかと逡巡したのち、最終的に帰国することを選ぶ一連の展開である。映画は、この主筋を捨象し、さらにこの主筋を支える作家シャッドウエルの闘病から死にいたる一連の展開も捨象して、恋愛映画をつくりあげたのである。

恋愛映画をつくるにあたって小説から残されたのは、配給局の秘書アニータと通訳ジョルジョが恋愛と結婚を決めるに至る過程である。

しかし、それだけでは恋愛映画には十分でないと考えられたらしく、映画『愛の泉』はふたつの重要な要素

を追加している。ひとつは、作家シャッドウエルに関するもので、映画のなかでは、ふたつの恋の仲立ちをする人間味と優しさをもつ人格に変更され、自分の秘書と結婚する。だが、小説中のシャッドウエルは、病に冒された自分の生だけに最後まで執着しつづける人物であり、他人の恋愛などには関心を持たない。また、この人物の世話をしている女性は、名前こそ映画とおなじフランスだが、シャッドウエルの秘書ではなく姪であり、シャッドウエルが死去すると、ひとりアメリカに帰って行くのである。

映画『愛の泉』が、小説 *Coins in the Fountain* を恋愛映画に転換するにあたって追加したもうひとつの重要な要素は、マリアとデイーノ公爵との恋愛から結婚に至る展開である。小説のなかでは、アニータの前任の秘書たちのひとりのエピソードとして短く語られるだけのものが、映画のなかでは、主要な物語のひとつに格上げされ、膨らまされている。

映画『愛の泉 *Three Coins in the Fountain*』は、テレビの泉に願掛けをされた、アニータとジョルジヨの恋愛結婚（ひとつの硬貨）——小説の段階ですであつたもの——のほかに、マリアとデイーノ公爵の恋愛結婚（もうひとつの硬貨）と、フランスと作家シャッドウエルの恋愛結婚（さらにもうひとつの硬貨）とを追加して、泉にまつわる三つの硬貨の物語に仕立てあげたのである。

興味深いことに、映画が想を得た小説には、タイトルそのものが異なる二つの版がある。映画の公開以後に出版されたペーパーバック版のタイトルは、映画と同じ *Three Coins in the Fountain* (London: Brown, Watson Ltd., 出版年明示せず) だが、映画公開以前に出版されていたハードカバー版のタイトルは、*Coins in the Fountain* (London: Eyre & Spottiswoode, 1953) で、冒頭に“three”がなく。ペーパーバック版は、表紙に

映画に出演した二組の男女が、トレビの泉らしいものに硬貨を投げ込んでいる様子の写真を使用しているから、映画の影響力を利用して販売を促進するために、タイトル自体も変更されたようである。

小説そのものの意図が本来はハードカバー版のタイトルどおり、“Coins in the Fountain”（＝トレビの泉に投げ込まれる、さまざまな硬貨）の意味だったことは、冒頭で語られるエピソードから明らかである。

小説の冒頭では、主人公のバーティンがトレビの泉のそばにいて、作業員たちが水を止めて泉の清掃をし、そのひとりが泉に投げ入れられた硬貨を整理している様子を見ている。バーティンが尋ねると、硬貨を整理している清掃員が、第一次世界大戦以前には、泉に金貨を投げ込むひともいたが、いまでは少額硬貨ばかりになった、という。この話を聞いたバーティンは、つぎのような記事を書いてみようかと考える。

魔法の力を持つトレビの泉（ローマ）が今日清掃された際に、ひとびとが夢の代価を引き下げつつあることが明らかにになった。この泉の水は、伝承によれば、ひとびとをローマに連れ戻すとされるものだが、かつて訪れたひとたちなら銀貨を投げ入れたのに、現代ではペニー銅貨を投げ入れる観光客が増えている。一部の地元住民の話によれば、第一次世界大戦以前には、金貨が賽銭にされることも珍しくなかったという。ひとりの懐旧的人物は、ひとびとが古くからの伝承に口先だけの奉仕をしていて、泉の吸引力に対して名ばかりの金銭をささげているだけだと考えた。「みなさんが、それなりに真剣なのでしょう。けれど、昔ほどには信じていない。たぶん、この泉も、現代世界のなかではあまりにロマンティックで、ほんとうには存在できない夢になりつつあるのでしょう」とこのひとはこう (pp. 123⁽¹⁾)。

この文案のなかの「懐旧的人物」とはパーティン自身のことである。パーティンは、「わたしは十五年前に硬貨を投げ込んだときに、トレビの泉様、実際にあなたを信じていた。その結果、わたしは、ローマに戻ったどころか、まだここにいるのだ」(p. 13)、と語る。

小説では、トレビの泉の清掃が完了して、水が入れられ、噴水が動き始めたころ、老作家のシャッドウエルが現れる。シャッドウエルは、毎日、トレビの泉にやってきて、銀貨を投げ込んで帰るのだが、その理由は、シャッドウエル自身によって、つぎのように明かされる。

わたしは死を宣告されている人間だ。でも、この泉に硬貨を投げ入れることができるかぎりには、すくなくともまた一日、ここにやってきて硬貨を投げ込むことができるという希望が持てる (p. 18)。

癌に冒されて余命幾ばくもないこの老作家は、いつくか文学賞を獲得し、裕福になった人物で、数名の召使いとお抱え運転手と看護婦とを雇って、ローマの豪華な館に住まっている。しかしこの人物は、「今となっては、わたしの金が何だ。わたしの書いた多くの小説が何の役にたつというのか」と考え、現代人の生活には「形式も形態も意味もない」という虚無感をいだいている。しかし、この人物は、ひとは何か希望がなければ生きてゆけない存在だと考えており、その唯一の希望がトレビの泉なのである (p. 18)。しかし、シャッドウエルは、小説の終末近くでは、病が末期状態となり、自動車で病院に連れて行かれる際に、泉に硬貨を投げ入

りたいと思うが、すでに声が出ないので、車を泉へ向けさせることができない。つまりは、この人物は、唯一の希望を実現させることのできないまま、絶望状態で死ぬのである。

この *Coins in the Fountain* という小説は、ふつうは忌避される十三という数の章で構成されている。それはおそらくは意図的なもので、この小説が、副主人公シャッドウエルが絶望して死に、主人公バーティンもローマに夢を失って帰国する内容であるからだろう。小説 *Coins in the Fountain* は、映画『愛の泉』とは似ても似つかない暗い内容だったのである。

小説のタイトルとのかかわりで注目して良いのは、冒頭で、トレビの泉に関連したことがらとして、十五年前に硬貨を投げ入れたときの願いがあまりによく実現して後悔している主人公バーティン、そして、唯一の希望としてトレビの泉にすがっているシャッドウエルのほかに、小さなエピソードが語られていることである。それは、アメリカからローマ観光に来ている若いカップルで、このカップルは、その場で一ドル札を四枚の二十五セント硬貨に両替してもらって、その一枚を泉に投げ込む。この行動について、バーティンは、泉に硬貨を投げ込めばローマにもどれるという、広く宣伝されている幻想をひとまず認識しておいて、硬貨を泉に投げ込むことも、ローマ・ツアー料金の一部分だとみなしているものだ、と考える (p. 13)。

この小説は、清掃中のトレビの泉から回収された多種多様な硬貨のエピソードから始まることから見ても、ハードカバー版の "*Coins in the Fountain*" (＝泉のなかのさまざまな硬貨) をタイトルとするのがふさわしい。しかし、泉に投げ入れられた硬貨が、主人公バーティンと、副主人公シャッドウエルと、若いアメリカ人カップルとにとって、三者三様の意味を持っていた点は、好都合だったろう。映画のヒットを受け、その原作とし

て販売するために、映画とはまったく違った意味ながら、「泉のなかの三つの硬貨 *Three Coins in the Fountain*」というタイトルに変更することが可能になったからである。

四 恋愛結婚、経済格差、野蛮人

すでに見たとおり、小説 *Coins in the Fountain* と映画『愛の泉』とのあいだには、原作とその映画化とはいえないほどの大きな違いがある。それにもかかわらず、このふたつのあいだには興味深い共通点もある。

共通点のひとつは、どちらの作品も恋愛結婚至上主義を背景にしていることである。

映画『愛の泉』が全面的に恋愛と結婚とをめぐる作品であることは、すでに見たとおりである。そのなかで描き出される三つの恋は、いずれも障害を乗り越えて成就され、結婚へと繋がってゆく。

マリアと公爵との恋は、身分と文化背景の大きな違いを乗り越えて成就される。公爵は広大な館に暮らす大金持ちのイタリア貴族で、オペラやモダンアートに詳しく、楽器も演奏するような、ヨーロッパのハイカルチャーのなかで育ってきた人物である。一方のマリアは、アメリカで一軒のガソリンスタンドを営む人の娘で、職業は秘書、オペラも楽器もモダンアートもたしなまない庶民である。マリアは、さまざまな手を尽くして公爵に自分と結婚させようとするので、打算的とも見えかねないが、映画は、それも公爵のことを大好きであればこそだと観客に納得させて、身分と文化背景の違いを越えて恋が成就されることを祝福したいようである。

アニータとジョルジョとの恋は、経済力と文化背景の違いを乗り越えて成就される。アニータはアメリカ文

化を背景にする女性で、ドルとリラの為替格差がある状態のなか、ドル建てで給与を得ているので高収入である。一方、イタリア文化を背景にする男性ジョルジョは、リラ建てで給与を貰っているから、はるかに低収入である。アニータは、文化背景が異なるために相互理解が難しいうえに、経済的に生活の困難な相手との恋愛・結婚に、勇気を持って飛び込んでゆく。

フランスは、愛ゆえに、重病に罹っていて命のあやうい、はるかに高齢の男性との結婚に飛び込んでゆく。映画は、この愛についても、打算の影すら見せない。

恋愛結婚は、原理的に、男と女の身分・家柄・収入・文化・教養などが釣り合っていないほど、価値が高い。すくなくとも条件の高い側にとって、釣り合わない分だけ打算が少なく、愛の純粋性が高まり、その結婚は純粹なものになるからである。その意味で、この『愛の泉』という映画は、恋愛結婚への讃歌であるといえる。

小説 *Coins in the Fountain* も、小テーマは恋愛結婚にかかわる。小説でこのテーマに関係するのは配給局に勤める四人の秘書たちである。この四人は、新来のアニータ(映画と違い、アニータがローマに来たばかりの女性である)をふくめて、豪華なアパートメントをシェアして暮らす。

四人のなかのひとり、プリシラ(Priscilla)がいうように、この女性たちは、「わたしたち秘書の大多数は、結婚することだけに関心がある」(p.30)。さらに、別のひとりであるヴァージニア(Virginia)とプリシラとアニータの三者がとりかわす会話も興味深い。

「アメリカ女性は愛だけを理由に結婚するべきなのよ」、とヴァージニアが原則を宣言した。

「馬鹿いわないで」、とプリシラがいう。「三十歳になるまでに結婚しなければ、愛以外のものを探すよ
うになるものだわ。」

「わたしは、三十までに結婚したいわ」、とアニータがいったので、みんなが彼女を見た。(p.43)

この会話を言い換えるなら、原則としてアメリカ女性は恋愛結婚をすべきであるが、三十歳をすぎるところから
打算的になって、愛以外の条件を考慮するようになるということである。そしてアニータは、打算的にならな
いうちに恋愛結婚をしたいという希望を表明している。アニータは、このあとで、発言どおりに、文化背景が
異なっていて経済力もないイタリア男との恋愛と結婚に突き進んでゆく。右の場面での発言は、アニータの行
動の伏線になっているのである。また、この場でアメリカ女性なら恋愛結婚をすべきだという原則論を述べる
ヴァージニアも、小説の終わり近くでは、アニータの行動から刺激を受けて、文化背景の異なるイタリア人医
師との恋愛、そしておそらくは結婚へと歩みを進める。その意味では、この場での発言はヴァージニアの行動
についても伏線になっている。

この女性たちから見る場合、イタリア人独身男性の文化とは、粗雑かつ誇張的にいえば、セックスすること
にだけしか興味がなく、結婚を考えない、ということである。ヴァージニアのつぎの発言を見よう。

供給局のイタリア人従業員たちは、いつでも文無し状態なの。生きてゆくのに精一杯の収入しかないの。

それに、大部分の男たちは結婚しているわ。独身の連中が関心を持っているのは、あれをすることだけ

(p. 35)。

ただし、男性のあり方にかかわる米伊の文化背景の違いは、小説の別の箇所では、もう少し丁寧かつ非誇張的に説明される。アニータがジョルジョとの結婚をためらっている箇所である。

彼はわたしたちアメリカ人のひとりではない。恋しいジョルジョではあるけれど、外国人だわ。ずいぶん多くの点で違いがある。わたしが独立宣言について学んでいた頃、ジョルジョはローマ帝国について学んでいた。ジョルジョはカトリックだけど、わたしは無宗教。ジョルジョは迷信を信じているけど、わたしは彼の信じる迷信はどれも馬鹿げていると思う。……毎日花を持ってきてくれるけど、わたしのためにドアを開けてはくれないし、街路で、誰かとわたしの目の前で話すときでも、わたしを誰にも紹介しようと思わない。ジョルジョが礼儀を知らないのではなく、彼のタイプのイタリア人の振る舞い方にはふくまれないことだから、全然思いつかない。……わたしは、イタリア男性たちが、妻が何のためにいるのか、妻が生活のなかでどんな役割を果たすべきかについて、変な考えを持っているのも知っている (pp. 247-48)。

アニータがジョルジョとする恋愛結婚は、こういう文化の相違にもかかわらずなされるからこそ、純粹なものとして小説のなかで祝福される。これは恋愛結婚至上主義の鮮やかな実例である。その点で、この小説はすでに映画『愛の泉』と同じ原則に立っていたのである。

ところで、先に引用した四人の秘書たちによる三つの会話は、当時のローマに滞在していたアメリカ人女性たちにとって、適当な結婚相手がいかに少ないかという話題をめぐるものだった。これは重要な問題にかかわっているので、小説で述べられる彼女たちの置かれた状態を、もう少し詳しく見ておこう。この小説は、作者のセカンダリがローマに滞在していた当時の見聞にもとづいているようだが、それによれば、当時、ローマには百人を越す若い独身のアメリカ人女性がいた。彼女たちは、アメリカ合衆国経済協力局かアメリカ大使館の職員だった。それに対して、独身のアメリカ人男性は十二人しかおらず、そのうちの七人は事務員で、彼女たち秘書よりも給料が安いので、デートに誘ってくれる金銭的ゆとりがない。残り五人は管理職で、名門の娘と結婚して出世しようと考えているから、秘書などには目もくれない。しかも、供給局のイタリア人従業員たちは、いつでも文無し状態なのだ……、と話がつながってゆくのである。それゆえ、新来のアニータより以前からローマにいた秘書たち三人は、いずれも若くて美人であるにもかかわらず、適当なデート相手がほとんど見つからず、したがって恋愛結婚をできずにいる、という設定である。

当時のローマにいたアメリカの若い女性たちが、適当なデート相手がいないので、恋愛結婚が困難な状態だったことは、映画『愛の泉』でも重要な背景とされている。映画のなかでは、供給局局長の豪華な自宅でおこなわれたカクテルパーティーから帰る途中に、アニータとマリアとのあいだで次のやりとりがなされて、その事実が示される。

マリア

不思議だったわ。あのハンサムな公爵のほかには、パーティーで、魅力的な男性がひとりも私たちの近くに来なかった。

アニータ

今から、あなたの夢はくだいておいたほうがいいかもね。あなたがロマンスを求めるタイプなら、ローマは向かないわ。

マリア

あら、どうして。

アニータ

金持ちのイタリア人は秘書なんか時間に時間を使わないの。それに、供給局で働くイタリア人男性たちは貧しすぎる。

マリア

あなたが、結婚するためにアメリカに戻るのも当然ね。

ところで、彼女らローマのアメリカ国家机关に働く秘書たちにとって、現地採用のイタリア人男性たちが貧しすぎるためにデート相手にならないということは、彼女たちの経済的条件が恵まれているということと表裏一体の関係にある。映画『愛の泉』は、映像を効果的に使って、彼女らの生活ぶりとイタリア人通訳ジョルジ

ヨの生活状態とを対比する。彼女らアメリカ人秘書が住んでいるのは、ローマの街が一望できる丘の上にあるヴィラで、広々とした居間には美しい内装がほどこされて、広いテラスがついている。そして食事などの世話をしてくれるメイドがいる。二人あるいは三人でシェアするとはいえ、優雅な暮らしぶりである。それとは対照的に、イタリア人ジョルジョが住んでいる狭い部屋は、ローマの貧民街のなかの、外部も内部も廃墟のような建物のなかにある。

小説 *Coins in the Fountain* のなかでもアメリカ人秘書たちは、メイド付きの広くて美しいアパートメントに住まっており、マリアは、「世界のなかにまだ一カ所だけ、秘書が、一生に一度だけでも貴婦人のように暮らせる場所があるのを嬉しく思う」(p. 31) のである。

アメリカ国家機関のアメリカ人秘書たちが、このように経済的に恵まれた生活ができた理由は、映画のなかでは、彼女たちがドル建てで給料をもらっていて、しかもドルとリラの換算レートがドル側に有利なからだと言明される。しかし、それよりも根本的な理由があった。小説 *Coins in the Fountain* (1953) と映画『愛の泉』(1954) がストーリーの背景にしている時代は、出版や公開よりも少し前の、第二次世界大戦で経済的に荒廃したのちに再建の途上にあつたころのイタリアである。つまりまだマーシャル・プランが遂行されている時期、小説のなかの表現では、「アメリカがイタリアの再建に最大限の努力をしているとき」(p. 54) である。アメリカはマーシャル・プランでイタリアには総計九億五千万ドルを超える無償供与を実施した。小説のなかではただ単に「局 Agency」と呼ばれる「経済協力局 (Economic Cooperation Agency)」、映画のなかでは「アメリカ合衆国配給局 United States Distribution Agency」と呼ばれて、堂々たる近代的建物に入っている

のは、アメリカ政府からのこの巨額の無償供与金をイタリアに対して割り振りしていた組織である。

当時の米国経済とイタリア経済とのあいだには、巨額の資金を無償で与える側と、それを貰わなければ経済復興が不可能だった側とのあいだの、はなはだしい経済格差があった。映画のなかで、アメリカ人秘書の「給料はドル建てでもらい、交換レートがこちら側に有利なのよ」という短い発言の背景には、米伊のこの甚だしい経済格差がある。

ところで、小説 *Coins in the Fountain* でも、映画『愛の泉』でも、そこに勤めるアメリカ人秘書たちがイタリア人従業員たちとデートをしにくい理由は、両者の経済格差だけではない。小説では、「はつきりした規則があるわけではないけれど、この局では、イタリア人従業員たちとデートしないほうがいいのよ」(p. 35)と表現される。映画では、もっと明瞭に、「この配給局の方針では、秘書は地元イタリア人従業員とデートするのが許されないの。バーゴイン局長の方針なのよ」と述べられる。のちにこの局長は、自分の方針の理由について、「この配給局では、外国にいるアメリカ人は母国に対する責任があると考えている。アメリカ人はつねに威厳をもって行動しなければいけない」というふうに説明する。

アメリカ人秘書が現地ローマの従業員と実際してはいけないという、この不文律あるいは明示的方針には、重要な問題がふくまれている。端的にいえば、それは現地住民への構造的蔑視である。この蔑視は、同じ頃に行われたアメリカ映画『サヨナラ Sayonara』(1957) およびその原作小説 *Sayonara* (1953) と比較してみることによって明瞭になる。

映画『サヨナラ』とその原作小説は、朝鮮戦争の時期、一九五一年の日本を舞台としている。両作品のなかでは、米軍将兵が現地日本の女性と結婚しても、米国に同行することが許さない法律が施行されている。ストーリーのようやく最後になって、この法律が廃止されるのだが、それよりまえに、副主人公である兵士は、日本女性と結婚したために本国送還を命じられ、妻を同行できないことをはかなみ、この女性と心中してしまうのである。

問題は、この法律そのものよりもむしろその背後にある考え方と感じ方である。映画と小説の主人公（米国空軍将校）は、日本女性と恋に落ちる前には、つぎのように考えていた。この主人公が、日本女性と結婚しようとする部下を止めようとする一連の発言である（映画からの引用）。

若い娘の写真を見せてやる。じっくり見ろ。たまたまおれの彼女だが、アメリカ娘だ。お前はアメリカ娘がどんな様子をしてるのか忘れてしまったのじゃないかと思うんだ。

おれには分からないんだ。なぜ、ごくふつうの正常なアメリカ人が、……。それとも、こう言うほうがいいかな。お前がこの日本娘と結婚したら、友達がみんなお前を馬鹿にするだろう。

目の垂れ下がった、このちんちくりんの日本娘 (this slant-eyed runt) と結婚したけりゃ、するがいいさ。それはお前の自業自得だ。

これらは明示的な日本人差別であって、それゆえに認識しやすい。それに、映画では、この主人公も、日本人女性に惹かれて認識を改め、結婚する方向へ進んでゆく。とはいえ、そういう考えと行動が、「ごくふつうの正常なアメリカ人」のものとは考えられない点に注目すべきだろう。小説についても、この点は同様である。

さらに問題なのは、むしろ潜在的な差別意識のほうである。映画『サヨナラ』は、歌舞伎、能、文楽、茶の湯、日本庭園、そして少女歌劇など、映画の制作者たちが特徴的と見なした日本文化を映像によって紹介してゆく。それは驚くほど充実した日本文化紹介だといえる。ところが注目すべきことに、歌舞伎が上演されている劇場の客席では、演技と演技との合間―幕間には―に多数の観客が弁当を食べる様子が映し出される。また、赤子を背負った母親が子供をあやす様子が映し出される。少女歌劇が上演されている劇場でも、やはり赤子を背負う母親たちの姿が映し出される。映画の映像は、伝統文化を中心に日本のエキゾチックな文化を紹介しつつ、欧米の礼儀では許されない行動を、そのなかに織り込んでゆくのである。

また、米軍将校とデートしている間柄のひとりの日本女性は、この将校を愛している理由を問われて、「背がとても高いから」だという。この表面的かつ軽薄な答えは、じつは、すでにブッチーニの『蝶々夫人』の台詞にも見られたものであり、「このちんちくりんの日本娘」という米国人側の蔑視と対になるような、日本人女性側のあこがれと認識されてきたものである。オペラ『蝶々夫人』のなかでは、蝶々さんが米国海軍将校に對して、「あなたを初めて見たときから、わたしはあなたが気に入りました。あなたは背が高く、力強い

(Siete alto, forte)。そしてほがらかに笑う」(第一幕)といていた。そして、ジェームズ・ミッチナー (James Michener, 1907-1997) の小説 *Sayonara* は『蝶々夫人』をふまえた作品であり、その事実を読者に意識させるように、作中では宝塚歌劇団がこのオペラのパロディーを上演する様子が描かれるのである。

さらに、映画『サヨナラ』は、米軍の將軍夫妻とその娘と主人公とが乗る高級自動車に、日本の田舎の道を走らせる。借り入れの終わった田畑が両側に広がっているこの道には、馬車が走っている。その光景は、好意的に見れば牧歌的だが、最新の高級自動車と対照されることによって、まことに後進的に見える。

また、日本女性と結婚した米軍兵士の暮らす家は、庭付きの日本家屋だが、その家のそばでは、川〔運河〕と呼ばれている) で職人たちが染め物をさらし、屋台店が出され、天秤棒をかついだ行商人や、貧しそうな老若男女が行き来している。これらの映像の一つひとつは、第二次世界大戦敗北後の日本が朝鮮戦争特需以前に見せていた光景をよく伝えている。しかし、さきほどの田舎の映像や、町のなかのこういう庶民的光景が、一方では、米軍のジェット戦闘機や高級自動車と対照的に映し出されたり、他方では、能や茶の湯のような日本の伝統的ハイカルチャーと対照的に映し出されたりすることによる効果を考えてみる必要がある。さらに、この映画は、日本社会の様子をいかにも全体的に紹介しているようでありながら、日本社会のなかの工業化を目指していた部分を捨象している。結果として、この映画の描き出す日本社会は、伝統文化だけを継承している、職人的かつ農業的かつ後進的な、非西欧的社会、すなわち〈アジア〉的社会である。米軍將兵と愛し合う女性たちもまた、そういう社会にふさわしい受動的かつ忍従的な女性たちとして描かれる。

映画『愛の泉』と比較するために、一見まったく共通性のなさそうな映画『サヨナラ』とその原作とを取り

上げたのは、ほかでもない。『愛の泉』もまた、イタリア社会のなかの非近代的かつ非西欧的な部分を意識的に映し出しているからである。

映画『愛の泉』のなかのイタリア庶民は、三十年も使ってブレイキもクラクシオンも壊れているトラックに乗って緑豊かな山地の村に暮らしていたり、ヴェネツィアの運河で下着姿で荷船を漕ぎながら働いていた、下町の戸外のカフェでのらくらしていたり、路上でサッカー遊びをしていたり、見知らぬ女性の尻をつねったりする人たちである。彼ら庶民はまた、自動車同士の衝突事故がおこると、双方がいつせいにわめき立てる人たちであり、廃墟のような不便な住宅に暮らしている人たちでもある。このような現地イタリア人庶民が、一方では、すこぶる豊かで効率的な様子のアメリカ政府機関や、そこで働くエレガントな秘書たちと対照的に映し出され、また一方では、ヨーロッパのハイカルチャーを身につけた、ひとにぎりのイタリア人上流階級と対照的に映し出される。この映画に描きだされる現地イタリアの庶民たちは、良い場合には〈高貴な野蛮人〉であり、悪い場合には端的な〈野蛮人〉である。そして、ちょうど、映画『サヨナラ』の米軍将兵が現地日本女性たちとの交際を抑制されるのと同じように、ローマの米政府機関に働く女性たちは、現地イタリア人男性との交際を抑制されるのである。

かつてアメリカ作家エレナ・クラーク (Eleanor Clark, 1913-1996) が、しばらくローマに暮らしたあとで、ローマはそれまで教えられてきたような西欧文化の起源ではなく、じつは〈アジア〉の町なのだと書いたことがある。

とつぜん閃いたのだが、これまでずっとわたしは、自分が居ると思っていた場所、つまり、自分の記憶のルーツのなかに居たのではなく、中国に居たのだ。ローマはアジアの町なのだ (*Rome and a Villa*, New York: Harper Perennial, 1950; 1974, p. 60)。

映画『愛の泉』の場合には、ローマだけでなく、イタリアの田舎も、ヴェネツィアもまた〈アジア〉と捉えられているといってよいだろう。映画『サヨナラ』が描き出したのも〈アジア〉なら、『愛の泉』が描き出したのもまた〈アジア〉なのである。

しかしまた一方で、恋愛結婚至上主義の枠内ながら、映画『愛の泉』と映画『サヨナラ』がともに一種の「進歩性」を持つ映画だったことを見落としてはならない。映画『愛の泉』のなかの女主人公のひとりアニータは、〈アジア〉的現地人との恋愛結婚に勇気を持って飛び込んでゆき、映画はそれを祝福しているからである。その点では、小説 *Coins in the Fountain* もまたアニータとヴァージニアというふたりのアメリカ人女性に〈アジア〉的現地人との恋愛結婚に勇気を持って飛び込ませるのであるから、すでに同様の「進歩性」を持っていた。映画『サヨナラ』も、主人公に〈アジア〉人である現地女性との結婚に勇気を持って飛び込ませ、それを祝福する点で、映画『愛の泉』と同様の「進歩性」を持っている。ミッチナーの原作 *Sayonara* が、主人公に現地日本人女性との恋愛結婚を断念させたのと、それは対照的な展開だった。

映画『愛の泉』は、こうして映画『サヨナラ』とともに、恋愛結婚至上主義の枠内で、〈アジア〉的現地人との恋愛結婚を祝福する点で、『アリヴェデルチ・ローマ』や『恋愛専科』とは異質の「進歩的」姿勢の作品

だったのである。『アリヴェデルチ・ローマ』は、イタリア系二世のアメリカ人が、好きなアメリカ人女性の後を追ってローマを訪れるが、自分を愛してくれるイタリア人女性と出会って結婚する話である。言い換えれば、これは、イタリア系の人物が、自分のルーツであるイタリアの女性と、正しい結婚をすることを祝福する映画である。『恋愛専科』は、アメリカ人女性が、恋愛結婚を求めてローマへ行くが、イタリア男には恋愛感情を抱かず、現地に滞在していたアメリカ人男性と、正しい結婚をする話である。どちらの映画も、異文化を背景にする異性との恋愛結婚という飛躍のない、その意味できわめて保守的な作品である。これらの映画と比べれば、映画『愛の泉』と小説 *Coins in the Fountain* は、進歩性が際立つのである。

おわりに

この拙文では、他愛のない恋愛もので、都市ローマの捉え方も軽薄と見なされがちな映画『愛の泉』を取り上げ、あわせて、それが利用した小説 *Coins in the Fountain* とも比較し、浮き上がってくる問題をいくつか考察してみた。

映画『愛の泉』は、都市ローマを〈水の都〉と表象し、その〈水の都〉のなかの「テレビの泉」の霊力が、さまざまな〈水〉の連環を利用しながら、最終的に三つの恋を成就させる、というぐあいに泉の霊験物語を紡いでゆく。その手並みは鮮やかだが、そもそも、映画のなかの〈水の都〉ローマというイメージ自体が、水の映像のみを切り取って連続させ、別の――これはほんものの――〈水の都〉ヴェネツィアの映像を組み合わせて作

り出した幻影である。この映像の手妻によって、映画はテレビの泉の靈験物語を可能にしたのである。

映画『愛の泉』が利用した小説 *Coins in the Fountain* は、主筋は映画とは異なり、アメリカ人にとってふさわしい居場所はどこであるのかを考察したのだが、映画はこの主筋を捨て去り、脇筋を膨らませて恋愛映画をつくりあげた。しかし、両者には重要な共通点がある。

第一に、どちらも恋愛結婚至上主義を背景にしていることである。映画『愛の泉』と小説 *Coins in the Fountain* は、どちらも、同時代にミケランジェロ・アントニオーニ (Michelangelo Antonioni, 1912-2007) が描いていたような、恋愛はしてもそれを結婚と結びつけない女性たち——『女とだち *Le amiche*』(1956) や『情事 *L'avventura*』(1960)——は描き出さない。『愛の泉』と *Coins in the Fountain* の女主人公たちはひたすら恋愛して結婚することを考えている。

第二に、小説と映画がともに、マーシャルプランを与える側アメリカと、それを受ける側イタリアの極端な経済格差を背景にしていることである。小説と映画のなかの、アメリカ人秘書たちが、経済的に恵まれた生活をする一方で、現地ローマで結婚相手を見つけない重要な原因のひとつは、この経済格差にある。その意味では、映画『愛の泉』と小説 *Coins in the Fountain* は経済小説の側面を持っている。

第三に、映画『愛の泉』と小説 *Coins in the Fountain* は、どちらも〈アジア〉的現地人への蔑視という背景のなかで、文化的障壁を乗り越えてなされる国際結婚を祝福する一種の進歩的側面も備えていることが注目される。

こうして、『愛の泉』と *Coins in the Fountain* は、どちらも、高尚あるいは前衛的な芸術作品ではないから

こそ、むしろ、庶民水準の同時代的問題を浮かび上がらせるのである。

【本稿は、JSPS科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究25580073)による研究成果の一部である】

注

(1) John H. Secondari, *Coins in the Fountain*, London: Eyre & Spottiswoode, 1953. 以下の引用もこの版。なお、拙稿中の訳文は、この小説もふくめてすべて拙訳である。

(2) *Three Coins in the Fountain*, London: Eyre & Spottiswoode, 1953 のカバーに書かれている著者紹介によれば、セカンダリは一九四八年からアメリカ合衆国の経済協力局 (Economic Cooperation Agency) のローマ支局で、情報部門の副局長を務めていた由である。